

2020年7月19日  
聖霊降臨節第8主日

家庭礼拝のための  
聖書・牧会祈禱・メッセージ



【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙 16章 1節～16節 (新約聖書 297頁)

【牧会祈禱】

命の源である神様

明るい朝をありがとうございます。暗いニュースが胸を覆い、答えの出ない悩みが日々沸き起こる私たちにとって、光は天地創造の時からあなたがくださっている希望です。どうか私自身の中に生まれる嘆き、苛立ち、恐れ、無気力から救い出してください。あなたの祝福のうちに身を置かせてください。

新型コロナウイルスの感染が拡大しています。感染対策にあたる国や自治体のリーダーたちが利害に捕らわれず、最善の決断をすることができますように。治療にあたっている医療者たちが神様によって体も心も魂も支えられますように。今、感染者への批判が高まっています。よく知らない人を勝手に非難し、責めることなど、誰にもできないことです。私たちは自分のなせることの範囲を分かっておらず、他者を傷つけ、自分を酷使します。どうかお赦してください。欠けがあり、完璧とはほど遠い私を神様が愛してくださったことに意味があります。どうか私たちに、またこの社会に謙遜と感謝、そして他者への思いやりを与えてください。

軽井沢幼稚園は1学期を無事に終えることができました。感謝いたします。あなたの名によって建てられた幼稚園、学校、施設が、今週も愛の業をなすことができますように。

神様、あなたは私たちを隣人のために祈る人としてくださいます。私たちに隣人を助ける方法が思い浮かばなくても、神様は違います。だからこそ、あなたに委ね、祈らせてください。今療養している友に回復を、自宅で礼拝を守っている友に祝福を与えてください。大水によって生活を奪われた人々に確かな導きがありますように。苦しんでいる人々に救いが、私たちに敵対する人々に平安がありますように。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におさげいたします。アーメン。

【メッセージ】

パウロは手紙の最後を教会の人々への挨拶で締めくくろうとしています。ここにはたくさんの人の名前が並べられていますが、最初に出てくるのはフェベという女性です。フェベはこの手紙をパウロから預かり、ローマの教会に届けた人物だと言われています。ケン

クレアイという港町に住んでいて、教会の奉仕者、多くの人の援助者でした。港町ですから、海で夫を失った寡婦たちがいたでしょうし、怪我や病気で働けなくなった人たちが流れ着いてきたでしょう。フェベは彼らを集めてお世話していたようです。パウロのような

使徒に宿を貸したり、伝道にかかる費用を援助することもあったようですから、ある程度の資産を持っていたのかもしれませんが。そのフェベがローマに出向くということで、パウロは彼女に手紙を託したのです。

彼女の受け入れ方をパウロはこう書きます。「あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けてあげてください」。キリスト教の迫害が強まりつつある時代、仕事に紛れてとはいえ、教会に手紙を届けるといのは危険を伴うことでした。けれども、フェベはパウロの熱意に打たれ、なによりこの福音が教会にとって必要だと信じて、届けることにしたのです。「この人はあなたたちのために命をかけてくれた人」。だから初めて会うとしても、全ての希望を叶えてあげてほしいとパウロは願います。主による出会いというのは、それまで過ごしてきた時間や積み重ねさえ越えるのだとパウロは言います。

次にパウロが名前をあげるのは、プリスカとアキラの夫婦です。「命を守ってくれた」は、原文で「首を差し出してくれた」という言葉です。おそらく、この夫婦はエフェソで集団から暴行を受けそうになったパウロを身を挺して守ってくれたのでしょう。ヨハネによる福音書 15 章 13 節には、「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」とあります。プリスカとアキラは「これ以上ない」と言われるほどの愛をパウロに与えたのです。主による出会いは命さえささげられるのだとパウロは言います。

しかし、それは彼ら自身の力によるものではありません。パウロも主によって出会った人々を信頼していますが、それは信仰者個人への信頼ではありません。この友らは自分と出会う前にキリストと出会っている。キリストの愛に触れている。パウロが信じるのは彼らの向こうにおられる主の働きなのです。

「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という聖句は、感動を覚えつつもどこかに諦めや無謀さを感じます。しかし、それは自分の信仰や力でできるかどうかを考えるからでしょう。「これ以上に大きな愛はない」というほど私たちが愛してくださった方はイエス様です。イエス様は私たちのために十字架で命をささげてくださいます。私たちはすぐに自分を卑下し、その存在価値を疑います。しかし、神様は私たちのために独り子さえ惜しまなかったのです。パウロはその神様を信じるのであって、友らが持つ個々の能力や強さを信じているのではありません。

牧師として歩み始めるときに、先輩牧師がこんな手紙をくださいました。「教会で牧会することは、自分が『できない』ことを知ることだ。多くの失敗や、納得できないことも山ほど起きるかもしれないが、矛盾だらけの毎日こそが牧者として大切なものに気づかせてくれるはずだ」。痛い挫折を繰り返して、ようやく自分の力を捨てられるようになります。本当に必要なことが特別な能力ではなく、悔い改めと祈りであったことに気づかされます。

フェベも、プリスカとアキラも、そしてここに出てくる大勢の信仰者たちも決して完璧ではありません。失敗や挫折もあったはずです。誰よりもパウロ自身が伝道を通して、自分の無力さを痛いほど感じていたでしょう。しかし、彼はキリストによって繋がる仲間、時も命も越えると確信しているのです。

だからこそ、パウロは一人ひとりの名前をあげて祈るのです。この「よろしく」という言葉は、日本語の挨拶とは違って、「近づいて、抱きしめて、キスする」という意味があります。「私の代わりに、主のために生きるこの人を抱きしめてほしい」とパウロは願うのです。私たちはそう願われている存在なのです。